

『三十六歌仙帖(中古三十六人歌合)』



三十六歌仙帖

和歌には六もしくは三十六という数字がよく出て来ます。これは、六と、その自乗の三十六が、ともに聖数として重んじられてきたからです。三十六歌仙といえ、藤原公任が編纂した『三十六人撰』に選ばれた、和歌の名手三十六人。柿本人麿が万葉時代の歌人ですが、他は平安時代中期頃の歌人たちです。在原業平・小野小町・遍昭は六歌仙にも選ばれていますし、他にも紀貫之・源順など、有名な歌人たちが名を連ねています。三十六歌仙を絵に描いた作品も、数多く残されています。

今回ご紹介する『三十六歌仙帖』も、そうした歌仙絵の一つです。とはいえ、先に述べた人麿や貫之らの三十六歌仙とは全く別の三十六人です。最初に登場するのは後鳥羽院、以下、藤原定家、宮内卿と新

古今時代の歌人たちが続きます。絵姿に書き添えられている和歌も、全て『新古今和歌集』から取られています。但し歌人は、新古今時代だけではなく、撰集時代の歌人・能因法師が最も古く、院政期の歌人も含まれています。『三十六歌仙帖』と呼ぶと、いわゆる「三十六歌仙」と紛らわしいのですが、たとえば『和歌文学大辞典』(古典ライブラリー、二〇一四年)では「中古三十六人歌合」として立項されている作品に該当します(この資料は歌合形式にはなっていませんが)。編者は不明ですが、寛元四年(一二四六)以降に撰ばれたものと考えられています。

国文学研究資料館所蔵の『三十六歌仙帖』は、本の収められている箱を覆っていた紙に、もともとは大名の前田家が所蔵していた本でしたが、その後、大聖寺が所蔵していたという来歴、そして、絵を描いたのは土佐光起(一六一七〜一六九一)であると記されています。絵と和歌が書かれた色紙形の脇に、和歌の筆者が誰かを示す貼紙があります。筆者は、主に中流の公家たちです。ここに記される人々や、光起の没年を考えると、おおよそ元禄年間(一六八八〜一七〇四)の初め頃に作られたものと推定されます。絹に描かれた彩色画が、金泥と雲母摺の台紙に貼られた、とても豪華な本です。状態もよく、美しい状態で残っています。

後鳥羽院の絵姿に添えられているのは、「鶯のなけどもいまだふる雪に杉のはしろきあふさかの山」(新古今和歌集・春上・十八)の歌です。後鳥羽院の歌を書いたのは、筆者の中で最も身分が高い有栖川宮幸仁親王です。後鳥羽院のこの歌を冒頭に、以下、三十六人の歌人たちの絵と歌が、四季・恋・雑の主題に従って並んでいます。それぞれの絵姿は、想像で描かれたものではありませんが、歌人たちが様々なポーズや容貌で描かれています。歌人の描かれ方の発想がどのようなところに根ざしているのか、どのようなイメージの蓄積の上にあるのか、興味深いところです。

(小山順子)